

モーニング侵略

モーニング侵略

作・中野浩作

登場人物

切子	・・・	いつもの朝
キリコ	・・・	偽物の朝
きりこ	・・・	本物の朝
モーニング	・・・	昨日の夜
中央キリコ	・・・	起きる朝

中央キリコを取り囲むようにして三人のキリコ（切子、キリコ、きりこ）。手にはそれぞれの朝食を持っている。（中央キリコに対して三人が背を向けているのが望ましい）

切子、両手に朝食を手をしている。

（出来れば、トーストにジャムを、目玉焼きを皿に乗せて持っていたい）

切子 「私の朝は、穏やかに始まる。朝は始まりである、と、私は感じている。昨日のことなど忘れて、新しい日々のスタートがここから始まるのだ。カーテンを引き、ベッドをきちんと直して、寝巻きを丁寧にたたみ、顔を洗って、そして、朝食の準備が始まるのだ。

トーストは五枚切りであると決めている。焼き時間は大体3分程度。それが一番かりつと仕上がる。目玉焼きは二つ。ベーコンは長めのものを使い、醤油よりも、塩コショウの方がいい。コーヒーマーカーは出来るならばインスタントよりもドリップコーヒード。コーヒーマーカーが欲しいのだけれど、忙しい朝の時間に、使いこなせるかどうか不安なので未だに手を出せないでいる」

キリコ&きりこ「朝」

切子 「テレビをつけ、適当な番組を片目に見ながら、よく焼けたトーストにマーガリンを塗りたいく、目玉焼きの黄身を潰す。かりつとした食感のトーストと、コーヒーマーカーの香ばしい香り」

三人キリコ「今日という新鮮な日の始まりをあらためて実感する」

切子 「ふと、窓の外を見ると、青い空がある。霞がかった都会の空は、故郷の空とはずいぶん違うけれど、その空は間違いなく私の空で、この空の下で」

三人キリコ「今日も新しい一日が始まるのだ」

切子 「あ、朝のニュースが占いの時間だ。そろそろ出ないといけない。食事の終わった皿を流しに放り込み」

三人キリコ「昨日の晩に」

切子 「作っておいたお弁当をカバンに入れ」

三人 「さて」

切子、何かを発見する。よくよく目を凝らして何者かを見る。

切子 「なんで？ なんで？ なんで？ なんで？ なんで？ っていうか、お前は誰だ！！！！」

モーニング登場。

モーニング 「おはようございます」

切子 「誰？」

モーニング 「それは心外ですねえ」

切子 「(不審げな視線をモーニングに向ける)」

モーニング&きり&きり 「朝」

「です」

切子 「何？」

モーニング 「ですから」

モーニング&きり&きり 「朝」

モーニング 「です。毎日あなたの元に訪れるでしょう？」

切子 「違う」

モーニング 「違います。私は」

きり&きり 「朝」

モーニング 「です。あなたの元に毎日やってくる」

モーニング&きり&きり 「朝の」

モーニング 「比喩でなく、暗喩でもなく」

きりこ 「正真」

きりこ 「正銘の」

モーニング&きり&きり 「朝」

切子 「・・・お前は、昨日だ」

モーニング 「おや？」

切子 「昨日の夜だろ？ お前」

モーニング 「いいえ、今日の朝です」

切子 「どういうこと？ 朝はどこに行ったのよ？」

モーニング 「ですから、私が朝ですよ。新しい朝。お求めになったでしょう？ いつもお求めになっているでしょう？ 新しい朝。それが、私。あなたのお望みの新しい朝があなたの元に参ったまでです」

切子 「・・・」

モーニング 「さて、これから、お出かけのようですが、それはいけません。私は、新しい朝なので、新しい朝に見合ったあなたの新しい朝を迎えていただきます。なので、私が新しい朝になった意味がなくなってしまうです。なので」

モーニング、ぱちんと、指を弾く。

キリコ登場。手にはご飯と味噌汁を持っている。

モーニング 「ここに、新しいあなたの朝を用意させていただきました」

切子 「違う。そんなの違う」

モーニング 「なぜ？」

切子 「私の朝はトーストだって決まってるの。トーストに目玉焼きだって決まってるの」

モーニング 「いえいえ、ですから、こちらの朝を迎えていただきますと、こちらとしても困ってしまいます」

切子 「朝から、こんなの食べるわけないでしょう？」

モーニング 「食べる。良くないですねえ。先程からあなたの言葉遣いは耳に障る。これはいち早く、新しいあなたの朝に慣れていただきます」と

切子 「どいて。私は仕事に行くの。もう電車に間に合わない」

モーニング 「ご心配なさらず。今日からあなたは女子高生でございます」

切子 「はあ!？」

モーニング 「ええ、ですから、もうあと、15分程度の時間の猶予がございます。あと、これからは電車ではなく自転車通学になりますので」

切子 「嫌。絶対、嫌。帰れ」

モーニング 「そのように申されましても、私の帰る場所はこちら以外に――」

切子 「じゃあ、返せよ! 私の朝を! 私の朝はどこに行ったんだ!」

モーニング、何かが面白いらしい。

モーニング 「おっしゃるな、おっしゃらないで下さいな。妙なことをお言いでなさるな」

切子 「・・・あ？」

モーニング 「今日の朝を、あなたはいかがした？」

切子 「今日の朝を? 私が?」

モーニング 「そう、今日の朝を、昨日の夜に、あなたが(キリコに)ねえ?」

切子、突然、手にした朝食を食べ始める。

キリコ 「夜は、静かに過ごすべきだ。いついかなる時も、一人で孤独に静かに過ごす

べきだ。夜はご飯に味噌汁で、漬物と魚があったらいいな。ビールはほどほどにしないといけない。太ってしまう。夜更かしもしたくない。お風呂上りには簡単なストレッチ。9時頃から簡単な読書と資格のお勉強の時間。たまにはお友達とお電話するのも悪くない。でも、やっぱり、清く正しい夜の過ごし方はひとりでゆっくりと過ごすことだわ」

電車の音が聞こえる。

踏み切りの音のようだ。

カンカンカンカン・・・。

切子、夢中で朝食を食べている。

モーニング 「本日は、ご乗車いただき、まことにありがとうございます」

キリコ 「その日に起こったことは全部忘れて、やってくる明日に思いを馳せる」

モーニング 「当列車は、昨日の夜発、通勤急行、今日の朝経由、再び昨日の夜行きでございます」

キリコ 「きつと明日は大丈夫。明日こそ、いいことが起きる。そうだ、明日の朝に期待しよう」

モーニング 「当列車は、帰宅後の着替え」

キリコ 「明日の朝はきつと、素晴らしい明日の朝を運んでくれる」

モーニング 「メイク落とし」

キリコ 「銀のトレイに素敵な朝を乗せて。だから、大丈夫」

モーニング 「温かい夕食、飲酒」

キリコ 「さあ、お風呂が沸いたようだわ。入浴剤をたっぷり入れて、今日の疲れを落とさなきゃ」

モーニング 「入浴」

キリコ 「ああ、今日は本当に疲れた一日だった」

モーニング 「その他、今日の締めくくりの儀式的日常習慣には停車いたしません」

キリコ 「明日はきつと、いい事あるといいな」

モーニング 「お電話でお降りのお客様は諦めて下さい」

必死の形相で朝食を食べている切子。

すごく楽しそうに朝食を食べ始めるキリコ。

音楽はどんどん大きくなる。

電車の音、轟音。

切子&キリコ&きりこ、電話を取り出し、誰かに話しかける仕草。

切子&キリコ「夜は、静かに過ごすべきだ」

モーニング「着替えを通過します」

切子&キリコ「いついかなる時も、一人で孤独に静かに過ごすべきだ」

モーニング「メイク落としを通過します」

切子&キリコ「夜はご飯に味噌汁で、漬物とお魚があったらいいな。ビールはほどほどにしないといけない。太ってしまう。夜更かしもしたくない」

モーニング「夕食、飲酒を通過します」

切子&キリコ「お風呂上りには簡単なストレッチ」

モーニング「入浴を通過します」

切子&キリコ「9時頃から簡単な読書と資格のお勉強。たまにはお友達とお電話するのも悪くない。でも、やっぱり、清く正しい夜の過ごし方はひとりでゆっくりと過ごすことだわ」

モーニング「その他、儀式的日常習慣を通過します」

切子&キリコ「その日に起こったことは全部忘れて、やってくる明日に思いを馳せる。きつと、明日は大丈夫。」

モーニング「間もなく、今日の朝、今日の朝。折り返しまして」

切子&キリコ「明日こそ、いいことが起きる。そうだ、明日の朝に期待しよう」

モーニング「昨日の夜、昨日の夜」

切子&キリコ「明日の朝はきつと、素晴らしい明日の朝を運んできてくれる。銀のトレイに素敵な朝を乗せて。だから、大丈夫。ああ、今日は本当に疲れた一日だった。明日はきつと、いい事あるといいな」

切子&キリコ、朝食に突っ伏す。

無音。

モーニング「ご乗車、ありがとうございました。尚、当列車は、昨日の夜に停車せず、

このまま折り返し、昨日の夜に発車いたします。お降りのお客様は降りる

ことは出来ませんのでご了承ください」

電話の音。

ツーツーツー。

ツーツーツー。

唐突に、きりこ登場。電話を切る。

きりこ 「で？」

モーニング 「おや、おはようございます」

きりこ 「それで？」

モーニング 「ええ。ああ、あなたは無用ですよ。あなたはどのあなたでもない。ここにいる、どのあなたでもない」

きりこ 「そう、そうね」

モーニング 「ですので、お引取り下さい」

きりこ 「そうねえ」

きりこ、コーンフ레이크を取り出す。

モーニング、それを見て、眉をひそめる。

モーニング 「無駄ですよ」

きりこ 「朝を迎えるの」

モーニング 「いいえ、あなたは私の朝を迎えるんです」

きりこ 「なんで？」

モーニング 「それが一番正しいからですよ」

きりこ 「正しくない」

モーニング 「ええ。私がご用意した朝以外は、あなたにとって必要ではない。昨日の夜を忘れたいのでしょうか？ ですから、ご用意した。ほら、（キリコを指す）」

キリコ 「（きりこを見つめている）」

きりこ 「ふうん」

きりこ、キリコをマジマジと見つめる。

キリコ、きりこと目を合わせず、どこか他の場所を見つめている。

きりこ、おもむろにキリコの首筋にバターナイフを突きつける。

きりこ 「あんたは、どうなの？」

キリコ 「・・・」

モーニング 「止めていただけますか。あなたに傷がついたら困る」

きりこ 「困るのはあたしじゃなくて？」

モーニング 「ええ、そうですよ。ですから止めてください」

きりこ 「（キリコに）あんたはどう思ってるの？」

モーニング&キリコ 「何も思いません」

モーニング 「ほら、何も思いません、何も思わなくていいのです」

きりこ 「本当に？」

モーニング 「本当に」

きりこ 「あんたにやあ、聞いてない」

モーニング&キリコ 「じゃあ、これなら？」

きりこ 「うっとおしいよ、あんた」

モーニング&キリコ 「うっとおしいのはどちらでしょう？ この朝は、私の朝だ、あなた

の朝じゃない。あなたは、この朝には不適切だ」

きりこ 「うるさい。私はあんたと話してない」

モーニング 「だから——」

キリコ 「わたしは」

モーニング 「!!」

キリコ 「わたしは、わたしに、おはようと、言いたい」

きりこ 「(モーニングに) だつてさ」

モーニング 「(動揺して) え……。ちょっと、どうして？ どうして？ 私は用意して差

し上げた。あなたのための朝だ！ 他の誰でもない、あなただけの朝を差し

上げた！ 何が不満なんですかあなたは！」

キリコ 「不満なんてないよ」

きりこ 「そうそう。あるのは、私だけでいい。それだけ」

モーニング 「昨日の夜には帰れない」

キリコ 「知ってる」

モーニング 「やってくるのは新しい朝だけだ」

きりこ 「知ってる」

モーニング 「昨日の夜を失敗したあなたに、あなたの朝を迎える権利なんてない！ 昨日

の夜にも、昨日の朝にも帰れない！」

切子、起き上がる。手には携帯電話。

切子 「昨日の夜……」

モーニング 「そう、そうですよ、あなたは失敗した。あなたの適切な夜を、あなたは過ご

すことが出来なかった。だから私は折り返した。だから——」

きりこ、切子の携帯を閉じる。

きりこ 「だから？」

モーニング 「……」

切子 「もう通過してしまった」

キリコ 「通勤急行は行ってしまった」

きりこ 「乗り過ごしてしまった」

モーニング 「・・・」

切子 「だから、何？」

きりこ 「それが何？」

キリコ 「あなたは要らない」

切子 「ここは私の朝だ」

きりこ 「私だけの朝だ」

キリコ 「私は迎えている、私の朝を」

切子 「もうすでに迎えているの」

きりこ 「だから、あんたは要らない」

キリコ 「（モーニングに）あなたはマーガリンみたいね」

きりこ 「まったくだ。マーガリンみたいだ」

切子 「熱すると溶けて、冷えると固まる」

キリコ 「いずれは消えてなくなる」

きりこ 「溶けてしまえば皆同じ」

切子 「誰も気付かぬ、気付いて消える」

キリコ 「築く明日の朝の向こうの壁面の」

きりこ 「トースト立てたその壁面」

切子 「うすーく切っては、塗りたくり、」

きりこ 「バターナイフで切り裂いて」

キリコ 「お前の姿はどこにある？」

切子 「きっと本物あるいは偽の」

きりこ 「朝だか夜だか気付いておるが」

キリコ 「それがどうした馬鹿馬鹿しい」

切子 「ここは、私の朝だ！」

モーニング 「・・・知りませんよ。知りませんよ。あなたには朝は来ないでしょう。あなたの朝など二度と来ないんだ。来ないんです。何故なら、私は二度とあなたの前に現れない！」

モーニング 去る。

三人の切子、お互いを見やり微笑む。

三人 「おはよう」

中央きりこの脇に、それぞれの朝食置き、去ろうとする。

モーニング侵略

中央きりこ「あれ？ 定期がない」
暗転。

終